

技能構造を追求し、考える力を育む体育・保健体育学習 — 「ボールを持たないときの動き」に注目して ソフトボール —

1 単元のねらい

T台での安定した打撃による攻撃と、ボールを持たないときの動きといった仲間と連携した守備などのバランスのとれた攻防が展開できる。また、ボールを持たないときの動きを仲間と役割分担し、より効率よくアウトを取る方法を考えることができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえと資質・能力について

次の記述は本単元前に生徒へ「昨年度の授業で扱ったソフトボールについてどのような印象を持ちましたか」と質問した回答である。

- ボールがバットにしっかり当たったとき、気持ちがよくて楽しい。
- チームのみんなと協力してできるから楽しい。
- 難しいけどコツをつかめば上達しやすい。

このように生徒たちのベースボール型への関心は高いことがわかる。また、仲間と協力して得点したりアウトを取ったりすることに楽しさや充実感を味わっていることがわかる。

次に「タブレット端末の活用や仲間とアドバイスをし合うことは、運動のコツを知るために有効であるか」という質問に94%の生徒が「有効である」と回答した。

このように、生徒たちは仲間のアドバイスやタブレット端末を活用することで自分の動きを可視化したり自分と仲間の動きを比較したりすることで運動のコツを発見していることがわかる。

本学校園保健体育科では、子どもに備えさせたい資質・能力の一つに「技能構造を追求し、考える力」を挙げている。本単元では、この技能構造の追求を「ボールを持たないときに自分や仲間がどのように動けば相手の進塁を最小限に抑えることができるか」を考えることと捉えている。このとき、仲間や自分の動きを客観的に見たり知ったりして、どこに・誰が・どのように動けばスムーズにアウトを取ることができるかといった動きのコツを考える必要がある。そこで上記のような生徒の実態から、仲間からのアドバイスや作戦ボードなどを活用して自分や仲間の動きを可視化し、ボールを持たないときの動きのコツを追求する姿を期待したい。

(2) 資質・能力を育むために

単元の1次では、グループで互いの動きを観察し合って投打の正しいフォームを確認し、キャッチボールドリルも取り入れる。また、目安とするためにダイヤモンド1周のタイムを計測する。単元の第2次では、①グループで作戦を考える→②作戦を実行するための練習をする→③試合で作戦を実践する→④試合を受けて作戦や練習方法を評価・改善する→⑤全体で共有する→①グループごとに新たな作戦を考えるという流れで授業を構成する。授業は①～⑤までの流れを、①②と③④⑤に分けて2回の授業で1サイクルを行い、これを数サイクル行う。ここでは、ボールを持たない人の動きに注目するために場面設定や提示する資料を工夫すること

で、作戦ボードの利用や姉妹グループでアドバイスする生徒の姿を目指す。3次では2次で考えた戦術をもとに、グループの課題に応じてより大量得点・最少失点につながる作戦を考えリーグ戦にのぞむ。

3 展開計画 (全11時間)

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	1 2	○基本動作のふりかえり及び試しのゲーム ・昨年度行ったゲームの基本ルールを確認する。 ・投打のポイントをふりかえる。 ・試しのゲームを行う。	◇投打の基本的な動作のコツを理解している姿 ◇試合のしかたを理解している姿
2	3 4 5 6 7 8	○作戦・練習・試合 (3イニング)・改善策 ・試しのゲームから打撃に注目し、狙ったスペースに打てるようグループで練習する。 ・作戦や練習を踏まえてゲームに臨み、大量得点を阻止することへ目を向ける。 ・カットマンを利用して、相手の進塁を最小限に留める方法を考え、姉妹グループと練習し互いにアドバイスし合う。 ・ゲームの中でカットマンを利用して進塁を阻止する。 ・チャートを応用し、打球や状況に応じて役割分担を変化させ、より効率よくアウトを取る方法を考える。 ・ゲームの中でボールを持たない人を利用して進塁を阻止する。	◇大量得点をするための作戦を考えている姿 ◇中継プレーのカットマンを利用して、進塁を阻止するための作戦を考えている姿 ◇仲間と協力して練習や試合を行う姿 ◇ボールを持たない人を利用して、走者の進塁を阻止している姿
3	9 10 11	○リーグ戦 (5イニング) ・ボールを持たないときの動きに注目しグループに応じた作戦を考え、仲間とアドバイスし合いながら他のグループとリーグ戦を楽しむ。 ○単元のふりかえり ・単元全体についてふりかえる	◇ボールを持たない人を利用して、より効率よく進塁を阻止するための作戦を考えている姿 ◇単元で学習したことについてふりかえる姿

4 授業の実際 ～技能構造を追求し、考える力を育むために～

(1) 系統的に学習できる授業づくりの工夫

対象の生徒たちは2年時にもソフトボールの授業に取り組み、投球動作や打撃動作などの基本的な技能を習得している状態である。また、2年時の単元終了間際に、効率よくアウトを取るための方法の一つとして「中継プレー」という方法があることを知識として理解している。

下記は単元終了後の生徒のふりかえりである。単元前の実態調査結果からも分かるように、ソフトボールの授業に対して関心・意欲が高い集団であるため、グループ練習やゲームなどの様々な場面で主体的に活動する姿を見ることができた。また2年時に習得した投動作や打撃動作などの基本的な技能を活用し、「ボールを持たないときの動き」についてより効率的に進塁を防ぐ方法などを考えようとする姿も見られた。

生徒A：2年生では基本的な投げ方や打ち方を学習しました。それを応用して、どこに動いてどのような声掛けをすると良いのか、直接的なプレーよりも間接的なプレーが上達しました。特に一番練習した中継プレーでは、相手の飛ばした距離・場所に応じて、何人のカットマンを使うのか、それは誰なのかなどを状況に応じて変えたりしました。

このように系統的に学習を積み重ねることができるよう計画的に授業を構想することで、生徒たちの運動に対する関心・意欲は向上し、より効率よく動くための運動のポイントなどについて考える力を身につけることができた。

(2) 手立てと工夫

単元終了後、再び生徒たちに「作戦ボードの活用や仲間とアドバイスをし合うことは、運動

のコツを知るために有効であるか」と質問したところ、97%の生徒が「有効である」と答えた。以下は単元終了後の生徒たちのふりかえりの内容である。

生徒B：別のチームを見ていて感じたことがあります。それは「A隊形」「B隊形」とバッティングをする人によって守備の形を変えていたことです。

生徒C：私たちのチームでは中継プレーを意識していました。何塁に投げるときは誰がとりに行き、誰がどの位置に動きカットマンとなるのか、声は誰が中心となって出すのかなど考えていました。しかし、実際にそのようにして上手くいくこともあれば、そうでない時もありました。カットマンは均等な距離感で入っていれば良いと思っていましたが、必ずしもそうではないと気が付きました。

生徒D：打ったボールが3塁の後ろに行ったときに、3塁を守っていた人がそのボールを取りに行くと、ランナーが2塁を通過しようとしていました。その時、2塁を守っていた人が守備のいない3塁に走り、3塁を守っていた人の代わりとなって動いていました。2塁の人の動きによって、無駄な進塁を防ぐことができましたと思います。(図1)

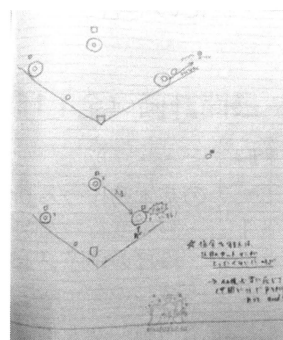


図1：ノートのふりかえり

このように、生徒たちは単元を通して個の技能習得のみにとどまらず、様々な仲間と連携した戦術や作戦を考え、深めることができた。また、他のグループの動きを見たり、作戦について考えたりすることで新たな気づきを得ることにもつながった。これらの学びがどのような場面設定やはたらきかけによって習得できたのか、以下に第2次の様子を具体例に挙げて紹介する。

(1) 技能を高めていくための学び合いの場の設定

第2次では、ゲームで出た課題を全体で共有し、その課題解決のための技能練習等をした後に再度確認のためのゲームをするという、保健体育科で大切にしている流れで授業を進めた。その流れの中で、技能を高めるために次の2つの学び合いの場を大切にした。

① グループごとに話し合う時間を設ける

まず、ゲーム前に作戦タイムを設定した。その際、「グループの状況に応じた作戦を立てよう」という視点を設けることで、練習した技能や戦術をどのように活用するのか、考える力につながった。また、ゲームを終えた後にも再度グループで話し合う時間を設けた。そこでは、「作戦の結果」や「ゲーム内で新しく出た課題」という2つの視点で話し合うことで、次のサイクルの練習にいかす姿につなげることができた。こうしたPDCAサイクル(図2)を大切にしながら学習を進めたことで、以下の生徒のふりかえりのようにグループの抱える課題を主体的に考え解決するための方法を模索する力を高める姿が見られた。

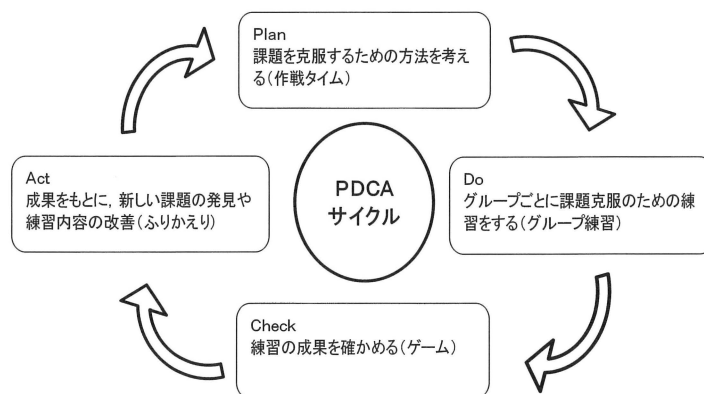


図2：PDCAサイクル

生徒E：今日は姉妹チームでゲームをしました。先の塁でアウトにするために「声がけ」と「1・2・3塁は空けない」という作戦を立てました。実際に試合をしていると、中継プレーをするために塁にいた人が動いたりとか遠くに行ってしまったので、塁がガラ空きになってしまい、相手に1度に10点ぐらいとられてしまいました。なので、後ろにいる塁を守っていない人が中継プレーをできるといいなと思いました。また、ホームは各塁の真ん中にいる人が来て守るといいかなと思いました。

② 姉妹グループの活用

自分の所属するグループ以外のグループとペアになり「姉妹グループ」として練習やゲーム

の様子を互いに観察し合い、課題点や工夫していた点などを伝え合う場面を設定した。グループごとに考えた作戦がゲームの中で実践できているかどうかを姉妹チームに見てもらおうことで、下記にある生徒のふりかえりのように、「できた」とことと「できなかった」とことを客観的に理解する姿につながった。ふりかえりの際には、自分たちの実感に加えて客観的なアドバイスをもとに次の作戦を練ることができた。

生徒F：中継プレイが少ないと姉妹チームからの指摘を受けたので、しっかりと役割分担をしなればいけないと思いました。支持の声も聞こえにくかったので1人2人ではなく、全員で統一して声を出すことが大切だと思いました。

(II) 技能を高めるために、動きのポイントについて考えるための工夫

① 作戦ボードの活用 (図3)

打球や点差に応じて自分や仲間がどのように動けばよいかを客観的に把握するために、作戦ボードを活用した。この作戦ボードを使って、グループで役割分担した動きをボード上でデモンストレーションすることにより、チームの状況に応じた作戦を俯瞰しながら練る姿が見られた。

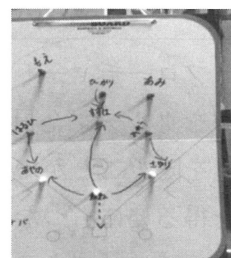


図3：作戦ボードの活用

② 毎時間のふりかえりや学習の流れを掲示する (図4)

1時間目の基礎技能の復習から単元のまとめまで、毎時間のふりかえりや学習の流れを模造紙にまとめて体育館に掲示した。その際、グループで抱えている課題や発見した動きのコツについて、授業内で共有しきれなかった内容をピックアップしてまとめた。その結果、内容を参考にして話し合いを進めるグループがいくつも見られた。また、個人の技能に課題を抱えているグループは、投球動作など基本的な技能のコツに立ち返るために、過去の掲示内容を見ながら練習する姿も見られた。



図4：ふりかえりと学習の流れを掲示

③ 「ボールを持たないときの動き」の全体像をつかみ、役割分担するための工夫

生徒G：一人と一人がボールをつなぐのではなく、何人かが縦に並ぼうと作戦を立てましたが、うまくいったので良かったです。

生徒H：みんなが集まりすぎて墨に人がいなくなってしまうたりしたので、役割分担が大切だと思いました。また、ボールが飛んだ位置によって変えないといけないと思いました。

これは第1次の試しのゲーム後の生徒のふりかえりである。「何人かが縦に並ぼう」という「中継プレイ」のもとになる動きを生徒自身が見つけ出すと共に「ボールを持たない人がどのように動けばスムーズにアウトを取ることができるか」ということを解決する方法として導き出している。また、生徒Hのふりかえりには、中継プレイをするときにグループの中で「役割分担」をする必要性を訴えている。上記のふりかえりを集約すると、生徒たちは「中継プレイでスムーズにアウトを取るためには、

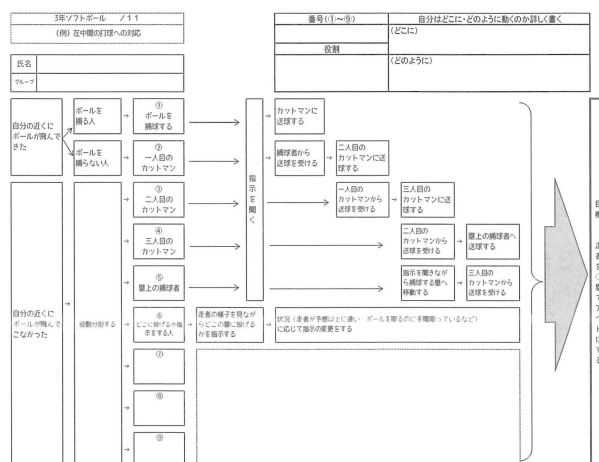


図5：中継プレイのフローチャート

役割分担をするという発見をしていることが分かった。

そこで授業者が作成したフローチャートを提示し、グループの実態に応じて各々がいずれかの役割を担って中継プレーに参加できるように工夫した(図5)。このフローチャートを使ってグループ内で役割分担した結果、以下のような生徒のふりかえりが見られた。

生徒I：自分の役割がわかると無駄な動きが減ってグラウンドがすっきりしたように感じました。そうすると人同士が重ならないので、ランナーの状況や仲間の位置が見えやすいと思いました。ボールが遠くに飛んだとき、別のポジションの人がベースにしっかりとカバーに入っていたり、ボールがいきにくいポジションの人がしっかりと声を出して伝えていたので、チームの形が出てきて嬉しかったです。役割を一人ひとりはっきりさせることで、落ち着いてボールを投げて、少しずつ無駄な出塁を防ぐことができました。

フローチャートを使って動きの可視化をしたことによって、誰が・どこに・どのように動くかをグループ全員で共通理解できた。また生徒Iのように「無駄な動きが減った」「無駄な進塁を防ぐことができた」といった、これまで「できなかった」ことが「できた」という達成感を得る姿にもつなげることができた。そして、下線部のように仲間との練習を積み重ね、仲間と一緒に「できる」ようになったことが「嬉しい」という運動ができた喜びについて感じる姿にも結び付いた。

5 おわりに

本単元では「ボールを持たないときに自分や仲間がどのように動けば相手の進塁を最小限に抑えることができるか」を考えるために、様々な学び合いの場やはたらきかけを行った。その結果、生徒たちは前年度の学習から中継プレーを導きだし、役割分担の必要性や中継プレー以外の「ボールを持たないときの動き」などに気付くこ



図6 フローチャートと作戦ボードを使って作戦タイム

とができ、教師の見立て以上に質の高い問いを持って学習に取り組んだ。こうした成果は、生徒の学習意欲や様々な学び合いの場の設定と動きを可視化するための教具等の工夫(図6)によるものである。また、作戦通りにアウトや点数が取れるたびに仲間とハイタッチをして喜ぶ生徒の姿を見て、作戦タイムなどを通してどのように動けばよいかを「わかる」ことが、練習やゲームでの「できた」につながり、その結果仲間との連帯感や達成感がうまれ、下記の生徒のふりかえりのように「楽しい」「やってみたい」「見てみたい」と感じるのだと改めて実感した。

生徒J：今までのソフトボールのイメージが変わり、また興味も出てきました。これからはソフトや野球を見たいと思います。

本単元の課題としては、授業の終末で生徒Cが書いたふりかえりの中で、中継プレー以外の「ボールを持たないときの動き」に「ベースカバー」が出てきたことをもっとクローズアップできたのではないかとこの点である。教師が授業の内容で扱う「ボールを持たないときの動き」が中継プレーに偏りすぎて、生徒たちが「ボールを持たないときの動き」を幅広く捉えることを邪魔してしまった。生徒が新しい切り口で「ボールを持たないときの動き」を考えることも想定しながら授業を構想すべきであった。これが実現していれば、ルールに残塁制度を改正して中学3年生の女子による「ダブルプレー」を取る場面が見られたかもしれない。今後の授業の中で、もっと生徒たちの可能性を信じ、教師も挑戦してみたいと思う難題に生徒たちと共にチャレンジしたいと思う。(文責：濱崎 可央理)